優秀賞

いつものあいさつ

岩手県立一関第一高等学校附属中学校　2年　小野寺　在

「ありがとうございました、さようなら。」

これを言わなかったことが私の失敗だ。

私は小学二年生の頃から習字を習っている。今年の六月、先生が亡くなった。九十四歳だった。先生はいつも笑っていて、声を荒らげることなど一回もない、優しくて元気な人だった。

ある土曜日、私がいつものように教室へ行くと、先生はいなかった。先生の娘さんが上がってきて、足が痛くて階段を上がれないので下の書斎にいること、作品が書けたら下に持ってきてほしいことを告げた。思えば、階段を上がれなかったことから感じとるべきだったのかもしれない。これまでそんなことは一度もなかったのだ。書斎へ持って行って見てもらっても、先生は変わりなく、いつものようにアドバイスをくれた。私はいつも太く書くともっと良くなる、と言われるが、そのときもそうだった。片付けをして教室を出るとき、私はつい、いつも言うあいさつをしなかった。聞こえないと思ったし、時間もなかった。

「ありがとうございました、さようなら。」

その二日後の帰り道、私は先生を見かけた。道路の反対側を歩いていた、杖をついた人がいて、先生かな、歩けるようになったのかな、と思った。その人がちらっと私を見た気がした。あいさつをするか迷って、人違いだったら困るのでしなかった。その人は教室へ入っていって、やっぱり先生だったのか、あいさつするべきだったな、と思った。

その日の午前中、先生は亡くなっていた。私はその人が、本当に先生だったのだと信じている。先生が最後、私に少しだけ姿を見せに来たのだと。

どんな人でも、いつ亡くなるかはわからない。もし迷ったら、そのときできる全てをするべきだ。私は二度もチャンスを逃した。もう戻ってこない。だからこそ、私はしっかりあいさつをする。お別れのとき、もう二度と後悔しないように。